『新渡花葉図譜』：幕末渡来植物の一資料

磯野　直秀

江戸時代の日本には異国産のさまざまな草花や樹木、農作物などが持ち込まれたが、天保年間（1830～43）頃から蘭船持ち渡りの種類が目立ちはじめ、安政6年（1859）の開港以後はその数が激増する。なかでも万延元年（1860）の遣米使節、文久2年（1862）の遣欧使節は何百種類もの種子を持ち帰った。これら幕末期渡来植物の図譜としては、旗本馬場大助が残した『遠西舶上画譜』（東京国立博物館蔵）や『群英類聚譜』（杏雨書屋蔵）が著名だが、国立国会図書館にも好資料の『新渡花葉図譜』（特7−147、2冊）が所蔵されていることは、残念ながらほとんど知られていない（注1）。

これは、尾張の渡辺又日菴（ゆうじつあん）（注2）が天保末年から明治初年まで描き続けた画集（注3）で、大正3年（1914）に伊藤圭介の孫伊藤篤（とく）太郎が母の小春（圭介の五女で、画才があった）に転写してもらった写本である。乾・坤2冊の袋綴じ本で、ともに縦26.2×横18.7 cm、用紙には手書きで枠を引いた四周単辺無界の和紙（乾巻の7丁だけは「植物図纂」の柱書をもつ刷用箋）を用いている。

乾巻は天保末年～元治元年（1864）、扉とも103丁95項：坤巻は元治元年～明治3年（1870）、54丁52項の構成で、多くの項目は1丁1項、ほぼ年代順の配列である。品数では両巻併せて130種に達する。著者又日菴の序文や跋文は無いが、坤巻の最終丁には篤太郎の識語がある。それには、『新渡花葉図譜』原本を又日菴の後裔である渡辺不仙氏から借り受け、母に転写を請うたこと、母の小春は大正11年（1922）11月に79歳で没したことなどが記されている。

本資料の特徴は、書名に「新渡」とあるとおり、大部分が幕末期の渡来植物である点で、しかも草木の大半に渡来年や、尾張に何処から何年に持ち込まれたかなどを注記する。そのなかには、いままで調べたうち、もっとも古

い渡来年あるいは記載年を示す事例（以下、「初出」と記す）が数多く含まれる。したがって、前記馬場大助の２著作とともに、渡来植物に関する貴重な資料に間違いない。

そこで今回、『新渡花葉図譜』所収品の同定を試みた。同定に当っては、遣米・遣欧使節持ち帰り品に関する報文（注４）や、『拾品考』（注５）、上記『遠西舶上画譜』、山本渓愚画『本草写生図譜』（注６）などを参照した。

＊　　＊　　＊

調査した結果は次頁以下の表にまとめたが、それによって判明した点の概要は下記のとおりである。

（１）渡来例の初出と思われるのは、計36品。そのなかにはオジギソウ、カーネーション、カンナ、グラジオラス、シュクシャ（通称ジンジャー）、ゼラニウム（テンジクアオイ）、ヒアシンス、ヨウシュチョウセンアサガオなど、馴染み深い種類が含まれている（配列は五十音順、以下も同じ）。

（２）上記以外の初出例にはアメリカセンノウ、アメリカナデシコ、サンジソウ、サンユウカ、シロチョウマメモドキ、ツタバキリカズラ、ツバメスイセン、ナンテンソケイ、ニクイロシュクシャ、ムラサキナツフジ、モクワンジュなど、他書ではほとんど見かけない種類が少なくない。

（３）本資料が初出ではないが、幕末に渡来して現在も広く栽培されている種類が、カラー、キキョウナデシコ（フロックス）、キンギョソウ、キンケイギク、クロタネソウ、ジギタリス、セイヨウマツムシソウ、トウワタ、ノウゼンハレン、ハナカタバミ、ハナヅルソウ、ハナビシソウ（カリフォルニア・ポピー）、バーベナ、ハルシャギク、パンジー、ヒャクニチソウ、フクシア（ホクシア）、ペチュニア、マツバボタン、マツヨイグサ、ムギワラギク、ヤグルマギク‥‥と、数多く描かれている。ただ、天保末年（1840頃）に持ち込まれて流布したダリアは、本資料に見当たらない（→注３）。

（４）万延元年（1860）の遣米使節と文久２年（1862）の遣欧使節が、計数百点もの種子を持ち帰っており、本資料に所収されているハクチョウソウやヒャクニチソウ、フウリンソウ、ペチュニア、マツバボタンなどはこの時の持ち帰り品と思われるが、その数は意外に少ない。なお、名古屋に入ったのは、使節が持ち帰ってから２～３年目が多い。

（５）入手先を明記している例をみると、江戸が24件と群を抜き、ついで摂津池田（植木屋が多かった）など大坂方面が10件、横浜が５件となる。

江戸では、幕末期の植木屋として名高い内山長太郎や森田六三郎など、摂津では吉田村の小右衛門と連絡があったらしい。遣米・遣欧使節持ち帰り品は、当然ながら江戸あるいは横浜から仕入れたものが多いが、ムギワラギク（乾72）のように、摂津池田から取り寄せた品もある。

（6）本資料の図と説明文が、伊藤圭介編『植物図説雑纂』（国立国会図書館、別6−9）に転写されている。これまで気付いた例は、乾16のドリコスが同書の冊45、坤14の木キリンが冊243、坤46のイギリス菊が冊20に所収されているなど、20件近くある。圭介は明治34年（1901）に没しているので、本資料の原本から転写したと思われる。

（7）冒頭で馬場大助著『遠西舶上画譜』に言及したが、同書には本資料と共通している種類が少なくない。たとえば、前記（2）で他書にほとんど描かれていない植物を挙げたが、そのうちのアメリカナデシコ、サンジソウ、シロチョウマメモドキ、ニクイロシュクシャ、それ以外ではイチゲハマベズイセンや黄花カンナ、ハナヅルソウなどが『遠西舶上画譜』にも記録されている。尾張の渡辺又日菴と江戸の馬場大助のあいだに交流があった証拠は見出していないので、この二人はたまたま江戸の同じ花戸から珍しい園芸品を取り寄せていたように思われる。

表　『新渡花葉図譜』所収品の同定

① 原記載名欄の〈　〉内は原本の振仮名、（　）内は漢字名や注記など、（和）は和産品である。下線を付して、読みやすくした場合もある。

② 現和名欄で〰〰〰を付した渡来品は、これまで調べた資料のなかで、渡来年・記載年がもっとも古いものである。

③ *を付した種類は、万延元年に遣米使節が初めて持ち帰った品である。
**を付した種類は、文久2年に遣欧使節が初めて持ち帰った品である。

④ 備考欄には注記の要約などを記した。「　　」は注記原文どおりの引用、「来る」は「尾張へ来る」の意である。「花戸（かこ）」は植木屋を指す。出典を明記した場合は引用であり、「：」の後は磯野の注である。また、「東山本」については、注3を参照されたい。【口絵X】は本号巻頭の写真番号。

⑤ 表には和暦しか記さなかったが、天保元年＝1830、弘化元年＝1844、嘉永元年＝1848、安政元年＝1854、万延元年＝1860、文久元年＝1861、元治元年＝1864、慶応元年＝1865、明治元年＝1868、である。

⑥ 紙数の制約から、大半は原産地を挙げなかった。

⑦ 稿末に索引を付した。

項	原記載名	現和名	備考
[乾巻]			
1	黄柏、黄檗(和)	キハダ？	
2	ヲウヤフラク(和)	ヨウラクツツジ類	「信州産、ヤウラクツツヂノ類」
3	釣藤［鉤藤？］(和)	カギカズラ	
4	赤栴檀	？	「舜水携来…後楽園植三種之内」：明の遺臣朱舜水は寛文5年（1665）に水戸藩の賓客となった
5	バリバリノ木(和)	バリバリノキ	「奥伊勢・南勢ニ多ク有リ」
6	木賊蘭：黄花	トクサラン	Calanthe venusta（本草写生図譜、冊1−1による、→注6）
7	ハマナス：紅八重（和）	ハマナス	東山本には、白花も所収する
8	白花万重山梔（和）	クチナシ（八重）	
9	鳳登蘭	？（ラン科）	「漳州産」「天保ノ末ニ渡来」
10	レリイナルキス	スイセンアヤメ	天保12年蕃船舶載
11	フララス	トウワタ	別名「フラートハツトス」
12	ネブリ草	オジギソウ	天保13年2月、摂州豊島郡木部の季兵衛が長崎から持ち帰るとの、江戸花戸内山長太郎の文を転写している
13	海紅豆	ナンバンアカアズキ	「天保年中舶来」と記すが、『拾品考』の嘉永元年渡来が正しいと思われる
14	醋甲〈サカウ〉	ムラサキナツフジ（一名、サッコウフジ）	享保年間に琉球より渡来したが普及せず。天保年間、薩摩より改めて2株来る【口絵1】
15	アワヲマモルリスブル、木葵	ショウジョウカ雑種	弘化年間渡来（注7）
16	ドリコス	シロチョウマメモドキ	嘉永3年、江戸花戸より来る（注8）：ドリコスは旧属名Dolichosに由来する
17	花縮砂、ガランガ	シュクシャ：白花	嘉永4年渡来：通称はジンジャー（注9）
18	黄花合歓	キンゴウカン	嘉永5年、蘭船持ち渡り

19	白花合歓	ギンゴウカン	嘉永 6 年、蘭船持ち渡り。摂州吉田村花戸小右衛門が種子から育てる
20	ノフゼンハーレン	ノウゼンハレン	橙色花：弘化 2 年渡来（鍾奇遺筆、冊 5 ：注 10）【口絵 2 】
21	風知草	？（イネ科）	ウラハグサ（裏葉草、風知草）ではなく、幅の広い葉をもつ
22	ヲキサリス・ローサ	ハナカタバミ	「同類同色ニシテ小ナルモアリ」はイモカタバミか、ムラサキカタバミ
23	和蘭海芋	オランダカイウ、現通称カラー	天保初年、尾州へ来る：『拾品考』の天保 14 年渡来が正しいと思われる
24	ホスメン、赤根ノ水仙	アカネスイセン	球根が赤い：弘化元年渡来（異国草木会目録：注 11）
25	亜盧会、ロカイ：誤称	ベニスジアマリリス	嘉永 2 年に開花
26	金箋慈姑、インヂアーンセン・ナルシス	キンサンジコ	弘化年間に栽培、嘉永 4 年に開花
27	咬嚼吧〈ジヤガタラ〉慈姑	ジャガタラズイセン	薩摩侯薬園より来て、嘉永 5 年に開花
28	智里〈キリ〉粉紅慈姑	サフランモドキ	弘化 4 年渡来：当初サフランと誤る
29	マンテマ	マンテマ	嘉永初年渡来：注 9 参照
30	アマランド：赤花	フジケイトウ	ケイトウ（鶏頭）の類
31	コンチョロ、カームペリア・ロトユンタ	バンガジュツ	嘉永初年渡来： Kaempferia rotunda【口絵 3 】
32	ナルシス・インチシユス	イチゲハマベズイセン	嘉永年間渡来：本草写生図譜、冊 1−29（→注 6 ）の同定による
33	スドリアータ	キバナハギ	嘉永 5 年、江戸花戸より来る
34	エゴイテンパータツリ	ナンバンクサフジ	嘉永 5 年 6 月、開花
35	エゴイテンハータツリ	ナンバンクサフジ	前条 34 とは、花がやや異なる
36	鬼見愁葉、木ワンシユ	モクワンジュ	嘉永 5 年 6 月に開花
37	ギンデマリ（銀手毬）	ギンケマル（銀毛丸）	嘉永 5 年渡来：サボテン
38	キンデマリ（金手毬）	キンケマル（金毛丸）	文久元年渡来：サボテン
39	白花長春花：八重	コウシンバラ	嘉永 5 年入手、蘭船持ち渡り

40	ヲヲ山レン華	ウケザキオオヤマレンゲ（受咲大山蓮花）	嘉永6年頃、江戸より来る：ホオノキとオオヤマレンゲの雑種とされる
41	茘枝	レイシ	「嘉永七…花実アリ」：安政元年、江戸花戸森田六三郎が開花・結実させたとの芦屋散人の記述がある
42	檳榔草、大ノキンハイ草	オオキンバイザサ	別名オオバセンボウ（大葉仙茅）
43	小葉センナ	コバノセンナ？	
44	大葉センナ	オオバノセンナ？	
45	ヤハズキン箋	マツヨイグサ	ヤハズキン箋＝矢筈金箋（注12）
46	ツキミ草	ツキミソウ	（注12）
47	クワエンサウ	カエンソウ（火焔草）	嘉永年間、蘭船舶載
48	ケレインドンドルバアルト	アカバナレンゲ	安政初年渡来：『草木図説』（注13）は嘉永年間渡米とする
49	花肉豆蔻、ノートモスカート、モスカート	？	嘉永3年渡来：Nootmuskaatはニクズク（肉豆蔻）の蘭名
50	ガランガ、良薑	ニクイロシュクシャ（肉色縮砂）	嘉永6年渡来、安政2年に初めて開花
51	イステサガシネヤ	サンゴバナ	安政2年開花　→坤48
52	鬱金香	カンナ：黄花	安政2・3年頃渡来、「カンナインヂカノ惣黄花ノモノ」：『遠西舶上画譜』は安政3年渡来とする
53	アルイツメアタン	？	安政初年渡来、白いウバユリ型の花
54	ナガルポーム	グラジオラス：橙色花	安政4年渡来【口絵4】
55	ホクシヤ	フクシア：萼は赤	安政5年、摂州池田より来る
56	ヱーホルヒウム	ハナキリン（花麒麟）	安政5年渡来、摂州池田より来る
57	キンギヨ草：赤花	キンギョソウ	万延元年、摂州池田より来る
58	キンギヨ艸：黄花	キンギョソウ	文久元年、摂州池田より来る
59	セレイテイヤ	キチョウジ（黄丁字）	万延元年、江戸花戸より来る
60	メリケン・ロクヲン艸、ジャガタラ柳草	ルリヤナギ	万延元年冬写生：別名リュウキュウヤナギ

61	ヱーケンベルラア	シロボシベゴニア	文久元年 6 月、尾張に来る（注 14）
62	大輪ノ素馨	ナンテンソケイ	文久元年、蘭船持ち渡り：別名ソケイノウゼン
63	メリケン産ニチニチ艸	ペチュニア*：白花	文久 2 年 5 月、横浜より来る
64	メリケン産ニチニチ艸	ペチュニア*：紅花	文久 2 年 5 月、横浜より来る
65	――（上と同品）	ペチュニア*：白花	白い花弁の先端が緑色を帯びる
66	ホルヒヱス	マツバボタン*	文久 2 年、大坂花戸より来る。赤・黄・白・黄弁底紅など、7 品
67	アメリカ産マツ虫艸	セイヨウマツムシソウ	文久 2 年 5 月、横浜より来る
68	大葉マツ虫艸	マツムシソウ類	葉のみの図、花は 67 と同じと記す
69	セイテラボウム	バンマツリ	文久 2 年、横浜より来る。「始メ紫、白花ニナリテ落花」
70	シンヤ・イルガンス	ヒャクニチソウ*：赤花 Zinnia elegans	文久 2 年、横浜より来る。「白花・黄花・薄紅、色々アリ、樺色モアリ」
71	黄花菜、フサアザミ	ベニニガナ*	文久 2 年、江戸花戸より来る
72	ヱドルボル、和名ヱイキウ花、カイザイク	ムギワラギク*	文久 2 年 9 月、「大坂池田ヨリ来ル。花、草木ノ花ト違イ、甚カタク、カンナカケニテ作リタル如キ音、指ニテ動カセバ、スルナリ」：テイオウカイザイク（帝王貝細工）・永久花の別名がある。現在のカイザイクは別種
73	ホツビシ	アザミゲシ*	文久元年渡来、同 2 年 5 月尾張に来る
74	常磐柿、阿蘭陀柿（和）	トキワガキ？	伊賀産
75	コンロントユス	ウスベニカノコソウ*	文久 3 年 2 月、江戸花戸より来る
76	スウヰートセンテット・フルナールクラス	？（セリ科）：白花	文久 3 年 3 月、尾張へ来る：フルナールクラスは vernal grass（イネ科のハルガヤ）と思われ、何かの誤りか

77	エスコルチウ	ハナビシソウ：黄花	文久３年、尾張へ来る：記載名は属名の Eschscholzia に由来する。別名カリフォルニア・ポピー
78	エスコルチウ	ハナビシソウ：白花	明治元年渡来
79	カツラナデシコ	ムシトリナデシコ*	文久３年３月、尾張へ来る：節の下に粘液環があり、虫がそれに粘着するのが和名の由来だが、食虫植物ではない
80	エイケンラシヤ：絞り	アメリカナデシコ	明治元年渡来：英名 Sweet William
81	エイケンラシヤ：赤花	アメリカナデシコ	文久３年、イギリスより渡来
82	―――	カーネーション	文久３年、イギリスより渡来（注15）
83	ルリヤス	ハルシャギク**：赤花	文久３年春、江戸より来る：ハルシャ＝ペルシアだが、原産地は北米
84	ルリヤス	ハルシャギク**：黄花	元治元年春、江戸より来る
85	ルリヤス	キンケイギク	元治元年春、江戸より来る：ハルシャギクと同属
86	メリケン柳草、ホスホラカウテルバランカ	サンジソウ（山字草）：赤花	文久２年、江戸より来る（注16）：柳草はヤナギランの異名【口絵５】
87	メリケン平穂ノ大麦	オオムギ	文久３年春、来る
88	メリケン六角ノ穂大麦	オオムギ	文久３年春、来る
89	アメリカ産紫実鵲豆、センゴクマメ、フヂマメ	フジマメ：赤花	「文久二年西洋ェ使節ノ時、持帰ル」：注４文献には記載されていない
90	メリケン産イガホウツキ：紫花	ヨウシュチョウセンアサガオ	文久２年渡来：別名ムラサキチョウセンアサガオ、いま広く野生化
91	バアークラヤナ	ツタバキリカズラ（蔦葉桐葛）	文久３年に渡来、原記載名は Maurandya barclaiana の種小名より【口絵６】
92	ビヤアービイナー、七宝草	バーベナ*：紅花	文久３年９月、江戸花戸より来る：記載名は属名 Verbena に由来する
93	ビヤアービーナー	バーベナ*：薄紅花	文久３年９月、江戸花戸より来る

94	七宝草	バーベナ*：紫花	
95	亜米利加産芙蓉	モミジアオイ：紅花	文久３年渡来：ハイビスカス属の一種

［坤巻］

1	春蘭（和）	シュンラン：緑花	元治元年３月写生、花と葉は白覆輪
2	白頭翁 青毛咲（和）	オキナグサ	元治元年３月、江戸より来る
3	ヒトトメ草：紅花	キキョウナデシコ*	元治元年３月、江戸より来る
4	人ドメ草：淡紅花	キキョウナデシコ*	
5	アフセト草（注17）	アラセイトウ：橙色花	元治元年３月、摂津池田より来る
6	西洋アラセイトウ	アラセイトウ：紅花	元治元年４月、江戸より、横浜舶来品
7	万重アラセイトウ	アラセイトウ：紅八重	元治元年４月、江戸より、横浜舶来品
8	ガランガリヤウ	フウリンソウ**	元治元年４月、江戸より、横浜舶来品
9	仙人掌草：橙色花	？（サボテン類）	元治元年５月、江戸花戸より来る
10	大ヅツ：白花	カセイマル（花盛丸）	文久初年渡来、元治元年６月開花：サボテン類
11	天竺蜀葵：赤花	テンジクアオイ（天竺葵、ゼラニウム）	元治元年６月、摂津池田より来る
12	天竺ノ花アフヒ：白花	モンテンジクアオイ	前項と同時か【口絵７】
13	亜墨利加産胡椒ノ木	コショウボク	元治元年春、写生（注18）
14	木キリン	モクキリン：サボテン	慶応元年２月、摂津池田より来る
15	白蝶花	ハクチョウソウ**	慶応２年３月、江戸より、横浜舶来品
16	ブウルーヱー、丁字瞿麦	ヤグルマギク*：紫花	慶応２年３月、江戸より、横浜舶来品
17	リウヱン草	ヒエンソウ（飛燕草）**	慶応２年５月、江戸より来る
18	葉ボテン	ハサボテン Epiphyllum hookeri	嘉永４・５年頃の渡来、慶応２年６月の夜に大菊状の白花が開く（注19）

19	ヘボル	サンユウカ（三友花）：八重	慶応２年春、江戸より来る：学名はErvatamia coronaria、三友花は漢名
20	木蔦蘿〈キルコウ〉	ルコウソウ？	慶応２年春、江戸より来る
21	―――	ファセリア？	品名も注記も無い
22	大ヅツ：白花	カセイマル（花盛丸）	文久初年渡来：坤10と同種、サボテン
23	ダンキク	ダンギク：紅花	白花種もあると注記
24	小蝶花	パンジー	慶応２年冬江戸より来る：文久２年渡来か（植物図説雑纂、冊254）
25	珊瑚覇王樹〈サンゴサボテン〉	？（サボテン類）	慶応元年２月写生？
26	スズムシ艸（和）	スズムシソウ	南伊勢産：キツネノマゴ科
27	イセハナビ	イセハナビの類？	慶応２年頃、横浜渡来：中国原産
28	フシヤシントウ	ヒアシンス：紫花	慶応３年渡来
29	フシヤシントウ	ヒアシンス：橙色花	慶応３年渡来
30	アメリカ新渡ヱニシダ	ハリエニシダ**	文久３年、尾張へ来る
31	サルヒア：紅花	ベニバナサルビア	慶応元年、花戸より来る（注20）
32	金蝋梅（和）	キンロバイ（金露梅）	かつて尾張の植木屋曽吉が持ち来る
33	シヤク菜	シャク Anthriscus aemula の一品種？	朝鮮産、対馬より来る：図よりセリ科であり、アブラナ科の杓菜ではない
34	菊葉天竺葵	キクバテンジクアオイ	慶応２年に尾張へ来る、横浜舶来品
35	国替リホクシヤ	フクシア	慶応４年に尾張へ来る：萼は白色、花弁は紅色、葉・花ともに大きい
36	罌子粟：紅花	ハカマオニゲシ**	慶応３年渡来：花の下に苞がある
37	紅花ノ蔓菜、洋名マンザイ	ハナヅルソウ	慶応４年６月、花戸より来る
38	ルリツバメ	ルリヒエンソウ**	慶応４年６月、花戸より来る
39	ボンデンセウキ	？（アオイ科）	慶応４年６月、渡来：黄花、底紅

40	洎夫藍〈サフラン〉	ツバメスイセン	明治元年、尾張へ来る【口絵８】
41	マツリカ草	キキョウナデシコ	明治元年、尾張へ来る（注21）
42	銀鮮花	クロタネソウ	明治元年、渡来
43	ウケ咲沙参	フウリンソウの類？	明治元年、尾張へ来る。総状花序で、ルリ色の花がみな上向きに咲く
44	姫剪秋羅桜咲〈ヒメセンヲウケ・サクラザキ〉	アメリカセンノウ	明治元年、渡来：鮮紅色の花、シベリア原産で、アメリカ原産ではない
45	チャボ大花葵	？（アオイ科？）	「高サ、二尺」：大型の赤花八重
46	イギリス菊	テンニンギク	明治２年、尾張へ来る：北米原産
47	アメリカ蘭	ケイビアナナス類	明治２年、渡来（注22）
48	カイマンスイトウ	サンゴバナ類	明治２年、尾張へ来る：乾51のサンゴバナとやや異なる
49	玉樟〈タマグス〉(和)	？	熱田源大夫の社にあるという
50	和蘭持渡リ桜草	クリンザクラの類？	明治３年春、尾張へ来る
51	ヂギ草：桃色花	ジギタリス*	明治３年４月、熱田にて入手
52	マツリ花（茉莉）	マツリカ	安政年間、尾張へ来る

注記

（１）磯野直秀、明治前園芸植物渡来年表、慶應義塾大学日吉紀要・自然科学、42号、2007年：本報に初出とした種類以外の渡来年・初出年については、この報文を参照されたい。

（２）尾張藩の家老をつとめた渡辺規綱（のりつな）（1792～1871）、通称半蔵、号又日菴（ゆうじつあん）・楽々軒である。

（３）名古屋市東山植物園には、渡辺又日菴自筆の『一之鳥居渡辺又日菴本草図譜』１冊が所蔵されている。これは全46品（重複を除く）から成り、うち34が『新渡花葉図譜』乾巻に含まれる品と同一で、その注記も国会図書館本とほぼ同じ場合が多い。又日菴はこの東山本を整理・増補・清書して『新渡花葉図譜』乾巻としたと思われる。ただし、ダリア（天竺牡丹、紅八重）やハマナス白花などは東山本だけにあって、『新渡花葉図譜』には移されなかった。

（4）遣米・遣欧使節持ち帰り品について、当時の片仮名表示の洋名から、元の学名・英名・仏名などを復元した下記の4報文を参照した。

遠藤正治、伊藤圭介が大河内家に送った植物、伊藤圭介日記、第7集、東山植物園、2001年：大河内構斎撰『舶来草類目録』(国立国会図書館､特7−461）についての報告。

遠藤正治、遣米・遣欧使節齎来の植物を記載した『草木図説遺稿』の発見、慾斎研究会だより、90号、2000年。

遠藤正治、慾斎が山本榕室に贈った遣米使節齎来の植物、慾斎研究会だより、91号、2000年：山本榕室編『花旗卉木名目』（岩瀬文庫蔵）所収の草木リスト。花旗国はアメリカ合衆国を指す。

遠藤正治、慾斎が山本榕室に贈った遣欧使節齎来の植物、慾斎研究会だより、93号、2001年：山本榕室編『花旗国種子目録』（岩瀬文庫蔵）所収の草木リスト。花旗国＝アメリカだが、種子の大半は遣欧使節がヨーロッパから持ち帰った品

（5）野田青霞、『拾品考』、嘉永3年（1850）刊（図あり）：青霞は長崎の薬目利（めききき）で、『拾品考』に記された渡来年は正確とみなせる。

（6）山本渓愚、『本草写生図譜』(影印本、同定は北村四郎)、全9冊、雄渾社、1981～83年：渓愚は、京都の山本読書室を創設した山本亀羊の六男で、本書は読書室所蔵資料の集成とみなせる。ただし、原記載に渡来年・写生年がほとんど記されていないのが欠点である。

（7）同定は『草木図説』木部巻2所収のアマヲマモルリスブル解説による：→飯沼慾斎著・北村四郎解説、『草木図説 木部』、保育社、1977年。

（8）乾16の花図は、『植物の世界』（朝日新聞社、1997年)、第4巻280頁のシロチョウマメモドキ Centrosema plumieri の写真と酷似する。その解説によると、本種はチョウマメ（Clitoria）属に近縁で、スマトラの産。馬場大助も本種を栽培して花とインゲンマメ状の豆果を写生し、嘉永3年（1850）渡来と注記している（遠西舶上画譜、巻4）。

（9）嘉永4年（1851）に蘭船がかなり多くの植物を持ち込んだことが、国立国会図書館所蔵の「竹園草木誌」（貴志忠美（きしただよし）著『朝暾集』[831−15]、冊8）からわかる。そのなかには、キダチチョウセンアサガオ（木立朝鮮朝顔)、チョウマメ（蝶豆)、ツルナシナタマメ、マンテマ（→乾29)、ロゼルソウなど、このとき初渡来の園芸植物や、インゲンマメおよびハッショウマメの欧米系品種も含まれる。

（10）岩永文禎、『鍾奇遺筆』、国立国会図書館、228−94：岩永文禎（1802

～66）は大坂の医師・博物家。本書はその備忘録的著作で、冊5には草木に関する記事が少なくない。なお、ノウゼンハレンは純然たる和語で、「花はノウゼンカズラに似て、葉（は）がハス（蓮（れん））に似る」の意を、オランダ語めかして名付けたというが、命名者は未詳。

(11) 高井正芳・賀島近信、『異国草木会目録』、刊本：高井・賀島が弘化2年（1845）に京都で開いた異国草木会の出品目録で、多くの品名に渡来年を添え、参考になる。

(12) ツキミソウは弘化4年（1847）、マツヨイグサは嘉永4年（1851）に渡来したが、その頃は両名称が混乱していた形跡がある。たとえば『草木写生図』（国立国会図書館、231−240）は現マツヨイグサに「月見草」、現ツキミソウに「待宵草」と記す。『遠西舶上画譜』巻4でも、現ツキミソウの図に「マツヨヒサウ」とある。なお、『植物図説雑纂』冊108のツキミソウ項には、「宵待クサ、花戸［の命名］」と書き入れている。宵待（ヨイマチ）草（グサ）の名は大正時代に竹久夢二が造ったと伝えるが、起源は渡来時にまで遡るのではないか。

(13) 飯沼慾斎、『草木図説 草部』、1856～1862刊：慾斎は大垣の医師、博物家。『草木図説』は「草部」のほかに、「木部」もある（→注7）。

(14)『本草写生図譜』冊2−11（→注6）の「ベイケンニラ」図の同定・解説による。

(15) 現在のカーネーションはオランダセキチクとセキチクの交雑によって作出されたというが、前者は正保～万治年間（1644～60）に渡来し、「アンジャベル」と呼ばれていた（地錦抄附録）。

(16) サンジソウ Clarkia elegans や、ホソバノサンジソウ C. pulchella の花弁は先端が三裂して、「山」の字に見える。これが和名「山字草」の由来と思われる。なお、ホソバノサンジソウは、遣米使節が万延元年（1860）に持ち帰っている。

(17)「アフセト草」は「アラセト草」の誤写だろう。アラセイトウ（ストック）は古く万治年間（1658～60）頃までに渡来していたが、幕末期には新しい品種がいろいろと持ち込まれたようである。

(18) 遣欧使節に随行した高島祐啓（ゆうけい）が、インドから「胡椒」の実を持ち帰った。それを京都の山本読書室で下種したところ、文久3年（1863）にコショウボク Schinus molle を得た（本草写生図譜、冊2−23：→注6）。しかし、これはウルシ科に属し、香辛料のコショウ（コショウ科）とは縁もゆかりも無い種類である。紛らわしい名称をもつコショウノキも、ジン

チョウゲ科に属する別種。

(19)『本草写生図譜』冊2−86の「鳳尾葉サボテン」と同品であり、その同定和名ハサボテンおよび学名に従った（→注6）。ただし、幕末期の花戸は、葉形のサボテンを広く「葉ボテン」と呼んでいたようである。

(20) 原注に「サルヒア・グルユチノサ」とあるが、Salvia glutinosaは黄花種で、誤り。

(21)『植物図説雑纂』冊211所収の「キキヤウペチュニヤ」（現キキョウナデシコ）項に、本項「マツリカ草」と坤4「人ドメ草」の図と注記が転写されている。

(22)『植物図説雑纂』冊156の「ケイビアナナス」（Pitcairnia muscosa、パイナップル科）項に本図と注記が転写されており、それにPitcairnia xanthocalyxの学名が添えられている。「ケイビ」は鶏尾で、葉の群がった姿がニワトリの尾のようだとの意味らしい。

謝辞　同定に際しては、雑花園文庫の小笠原 亮 氏から数々の御教示を頂きました。厚く御礼を申し上げます。

（いその　なおひで　慶應義塾大学名誉教授）

索引：所在は「巻－項番号」で示した。下線を付したものは記載名（一部のみ）、それ以外は現和名である。

アカセンダン　乾4
アカネスイセン　乾24
アカバナレンゲ　乾48
アザミゲシ　乾73
アマランド　乾30
アメリカセンノウ　坤44
アメリカナデシコ　乾80、81
アメリカラン　坤47
アラセイトウ　坤5～7
アルイツメアタン　乾53
アワヲマモルリスブル　乾15
イギリスギク　坤46
イセハナビ　坤27
イチゲハマベズイセン　乾32
イモカタバミ　乾22備考欄
インヂアーンセン・ナルシス　乾26
ウケザキオオヤマレンゲ　乾40
ウケザキシャジン受咲沙参　坤43
ウスベニカノコソウ　乾75
エイケンラシヤ　乾80、81
エゴイテンパータツリ　乾34、35
エドルボル　乾72
オウハク黄柏　乾1
オオキンバイザサ　乾42
オオヅツ（サボテン）　坤10、22
オオバノセンナ　乾44
オオムギ　乾87、88
オキナグサ　坤2
オジギソウ　乾12
オランダカイウ　乾23
カーネーション　乾82
カイコウズ海紅豆　乾13
カイザイク　乾72
カエンソウ　乾47
カギカズラ　乾3
カセイマル花盛丸　坤10、22
カラー　乾23
ガランガ　乾17、50
カンナ　乾52
キキョウナデシコ　坤3、4、41
キクバテンジクアオイ　坤34
キチョウジ　乾59
キハダ　乾1
キバナハギ　乾33
キルコウ　坤20
キンギョソウ　乾57、58
キンケイギク　乾85
キンケマル金毛丸　乾38
ギンケマル銀毛丸　乾37
キンゴウカン　乾18
ギンゴウカン　乾19
キンサンジコ　乾26
キンデマリ　乾38
ギンデマリ　乾37
キンロバイ金露梅　坤32
クチナシ　乾8
グラジオラス　乾54
クリンザクラ類　坤50
クロタネソウ　坤42
ケイビアナナス　坤47
コウシンバラ　乾39
コショウボク　坤13
コバノセンナ　乾43
コンチョロ　乾31
サクラソウ　坤50
サコウ醋甲　乾14
サフランモドキ　乾28
サボテン　乾37、38
坤9、10、14、18、22、25
サルヒア　坤31
サンゴバナ　乾51、坤48
サンジソウ山字草　乾86
サンユウカ三友花　坤19
ジギタリス　坤51
ジャガタラジコ　乾27
ジャガタラズイセン　乾27
シャク　坤33
シャクナ　坤33
シュクシャ　乾17、50
シュンラン　坤1
ショウジョウカ雑種　乾15
シロチョウマメモドキ　乾16
シロボシベゴニア　乾61
スイセンアヤメ　乾10

スイートセンテットフルナールクラス 乾76
スズムシソウ 坤26
スドリアータ 乾33
セイテラボウム 乾69
セイヨウマツムシソウ 乾67
セレイテイヤ 乾59
ソケイノウゼン 乾62備考欄
タマグス玉樟 坤49
ダンギク 坤23
チャボオオハナアオイ 坤45
ツキミソウ 乾46
ツタバキリカズラ 乾91
ツバメスイセン 坤40
テンジクアオイ 坤11、12、34
テンニンギク 坤46
トウワタ 乾11
トキワガキ 乾74
トクサラン 乾6
ドリコス 乾16
ナガルポーム 乾54
ナンテンソケイ 乾62
ナンバンアカアズキ 乾13
ナンバンクサフジ 乾34、35
ニクイロシュクシャ 乾50
ノウゼンハレン 乾20
ノート・モスカート 乾49
ハカマオニゲシ 坤36
ハクチョウソウ 坤15
バークラヤナ 乾91
ハサボテン 坤18
ハナカタバミ 乾22
ハナキリン 乾56
ハナヅルソウ 坤37
ハナニクズク 乾49
ハナビシソウ 乾77、78
バーベナ 乾92～94
ハボテン 坤18
ハマナス 乾7
ハリエニシダ 坤30
バリバリノキ 乾5
ハルシャギク 乾83、84
バンガジュツ 乾31
パンジー 坤24
バンマツリ 乾69
ヒアシンス 坤28、29
ヒエンソウ 坤17、38
ヒャクニチソウ 乾70
ファセリア 坤21
フウチソウ風知草 乾21
フウリンソウ 坤8、43
フクシア 乾55、坤35
フジケイトウ 乾30
フジマメ 乾89
ベゴニア 乾61
ペチュニア 乾63～65
ベニスジアマリリス 乾25
ベニニガナ 乾71
ベニバナサルビア 坤31
ヘボル 坤19
ホウトラン鳳登蘭 乾9
ホクシヤ 乾55、坤35
ホルヒエス 乾66
ボンデンセウキ 坤39
マツバボタン 乾66
マツムシソウ 乾67、68
マツヨイグサ 乾45
マツリカ 坤52
マツリカソウ 坤41
マンテマ 乾29
ムギワラギク 乾72
ムシトリナデシコ 乾79
ムラサキカタバミ 乾22備考欄
ムラサキチョウセンアサガオ 乾90備考欄
ムラサキナツフジ 乾14
モクキリン 坤14
モクワンジュ 乾36
モミジアオイ 乾95
モンテンジクアオイ 坤12
ヤグルマギク 坤16
ヨウシュチョウセンアサガオ 乾90
ヨウラクツツジ 乾2
ルコウソウ 坤20
ルリヒエンソウ 坤38
ルリヤナギ 乾60
レイシ 乾41
レリイナルシス 乾10
ロクオンソウ 乾60